



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 224 号 2010.12.24 発行 社会政策研究所

=====

毎日新聞の福島版に連載された「特別支援学校とスポーツ」は興味深い特集記事です。  
【kobi】

村木厚労省元局長：田中美佐子が演じ、TBSでドラマ化

スポニチ 2010年12月24日

厚生労働省の女性元局長の無罪が確定した文書偽造事件がドラマ化される。TBSのスペシャルドラマ「私は屈しない～特捜検察と戦った女性官僚と家族の465日」(来年1月31日後9・00)。ジャーナリストの江川紹子さん(52)が元局長を取材した月刊誌の記事が原案のフィクション。女優の田中美佐子(51)が主人公を演じる。

原作は、今年9月に月刊文芸春秋に約20ページにわたって掲載された江川さんの記事。主に「私」という一人称で書かれており、検察による取り調べの様子や拘置所生活を支えた家族ら、支えた人たちが書かれている。

ドラマ化はTBSの北川雅一プロデューサーがこの記事を読んだのがきっかけ。「不条理の中で“やっていない”と言う強さと家族の絆に感動した。会社から退社を迫られるなど不条理なことが起きるこの時代に生きるヒントになると思った」と話している。

当時の記者への取材などを加え、オリジナルドラマとして作り上げた。無実を主張しながらも逮捕された元局長が「認めてしまえばすぐにここから出られる」などの甘い言葉にも負けず、拘留や取り調べに耐える姿と家族の姿が描かれている。

この事件は元局長の無罪が確定した後、証拠品に当たるフロッピーディスクのデータが書き換えられていたことが発覚し、最高検が元検事を逮捕する事態に発展。検察トップの大林宏検事総長がこの事件など一連の不祥事の責任を取り、年内に辞任する意向を固めるなど波紋は今も広がっている。そうした中でのドラマ化に視聴者の大きな関心が集まりそうだ。

主演の田中は「こうやってえん罪ができていくってことを(ドラマを機会に)ぜひ知ってほしいと思います」とコメント。江川さんは「不本意なことで窮地に立たされた時でも生き抜く力とは何なのかを教えてもらいました。それを今度はドラマを通じてより多くの人たちを共有できるのだと期待しています」と話している。

厚生労働省文書偽造事件 障害者団体への郵便料一部免除制度を利用できるよう実体のない団体に証明書を偽造したとして、大阪地検特捜部は09年6月、厚生労働省元局長を逮捕、その後起訴した。大阪地裁は今年9月、元局長に無罪判決を言い渡し、最高検は押収したフロッピーディスクのデータを改ざんしたとして特捜部で主任を務めた検事を逮捕、起訴した。改ざんを隠蔽(いんぺい)したとして前特捜部長ら元上司2人も起訴され、3人は懲戒免職となったが、元上司2人は無罪を主張している。

育む心と体：特別支援学校とスポーツ / 1 いわき養護学校高等部 / 福島

集団で体力づくり 社会人への訓練にも

毎日新聞 2010年12月19日

7日午後3時過ぎの放課後。この日は火曜日。知的障害がある生徒のみ通う県立いわき養護学校（いわき市）体育館に、高等部の生徒が集まった。木曜日と合わせて毎週2回、生徒100人のうち男女約30人が参加するバスケットボールチームの練習が始まった。ドリブルやシュート、ゲームなどで1時間半汗を流した。

男子は10月、「第9回県特別支援学校スポーツ大会」で、2年連続優勝を果たした。だが、生徒にはそれぞれ技術に差があり、決してドリブルが速くない生徒がいれば、シュートがなかなか入らない生徒もいる。

「この活動には、普通学級とは違った意味がある」と話すのは斎藤寿紳教頭。試合に勝つことが目標ではあるが、生徒の多くは一定の体力が必要な製造業に就職することが多いため、それに備えた体づくりの目的も大きい。

さらに重要なのは、生活習慣の訓練としての側面だ。夏休みも週2、3日の練習を欠かさず、生活にリズムをつくる。体育館に他の教諭や客が来れば、指導の二階堂俊介教諭らがはきはきとあいさつするよう教え、練習メニューの合間は速やかに移動するよう促す。練習後はすぐに用具を片付けて着替えさせ、午後4時36分に学校前を出るバスに間に合わせる。

こうした行動を集団で反復することにより、生徒は社会の基礎を学ぶ。前キャプテンの田坂健太さん（18）は「チームワークの大切さを知った」と振り返る。

参加間もない1年生には、こうした取り組みについていけない生徒がいる。その時は3年生が寄り添い、支えることができる。教諭に頼らず、上級生から下級生へ規律を受け継ぐ雰囲気醸成されてきたという。同学年が集まるクラスにはない良さだ。二階堂教諭は活動を「競技のためだけでなく、社会に出るための重要な訓練だ」と位置づける。

成績がクローズアップされるスポーツで、特別支援学校の活動はあまり知られていない。現状の紹介を通して、意義と課題を報告する。（種市房子が担当します）

=====

ことば

### 特別支援学校

視覚や聴覚、知的に障害があったり、体が不自由な児童生徒に、一般の幼稚園や小中高校に準じた教育をし、主に自立のための知識と技能の習得を目指す。盲、ろう、養護学校も含めた総称で、県内には分校も含めて公立23校があり、約2000人が通っている。

## 育む心と体：特別支援学校とスポーツ / 2 いわき養護学校高等部 / 福島

安全のため複数教諭が指導 補助役も成果に喜び 毎日新聞 2010年12月20日

県立いわき養護学校（いわき市）の高等部バスケットボールチームを指導する教諭らのモットーは「技術面、心理面の小さな進歩を見逃さず、辛抱強くスモールステップ」。その兆しを察知するため、指導の中心の二階堂俊介教諭は練習前、生徒の担任に授業中に変化がないか聞くことも欠かさない。

練習は生徒それぞれの技術レベルや理解度に合わせた基本動作の反復が中心。例えば、ボールを持って3歩以上歩くことを禁ずるルール「トラベリング」が理解できていない生徒には、球を持ったらず立ち止まるよう何度も教える。生徒は繰り返しの中で体で覚え、うまくできないなりに上達していく。

ただ、安全管理の面から指導には細心の注意が必要だ。一般的に生徒は、てんかん発作を起こしたり、突然パニックに陥ったりすることがある。練習に参加せず、傍らで歩き回る生徒がいたり、意思を伝えるのが不得手でトラブルになることもある。

指導は緊張を強いられ、教諭は一定の人数が必要。いわき養護のバスケットでは、補助役の教諭も加わり5人前後が、生徒約30人を少人数に分け、シュート練習や筋力トレーニングを指導し、励まし、見守る。

二階堂教諭は「生徒は一生懸命。すぐ技術を習得できなくても、教師としては少しでも進歩が見えると何とも言えずうれしい。教えた分だけ成果がある。生徒から与えられる喜びは大きい」と話す。

県特別支援学校体育連盟によると、知的障害がある生徒が通う県内11校の高等部で、授業とは別のスポーツ活動があるのは7校。文部科学省は「人間関係の形成に資する」として推奨している。

各校は生徒を自立させる方法を検討するため、個々の最近の様子や体調を基に、親と医師、教師らが「ケース会議」を定期的に関く。放課後のスポーツ活動の様子も報告され、検討結果は指導にも生かされる。県教委特別支援教育課は「指導教諭が担任や家庭と連絡を取り、状況に合わせて生徒に接することが大切」と話している。

### 育む心と体：特別支援学校とスポーツ / 3 県立あぶくま養護学校 / 福島

フットサル、正式種目へ 試合で生徒が輝く 毎日新聞 2010年12月21日

毎年秋、特別支援学校高等部の生徒を対象にした「県特別支援学校スポーツ大会」がある。県高校総体の障害者版で、県教委特別支援教育課によると、同様の大会は全国でも秋田と千葉の2県にしかない。

9回目となった今年10月の大会は、福島市にある県営あづまの総合体育館と陸上競技場で開かれた。今回、初めて公開競技に採用されたのが5人制のサッカー「フットサル」。出場した県立あぶくま養護学校(郡山市)のサッカー部は、試合を特別な思いで迎えた。

部は8年前に創部し、現在は部員28人が週4日、放課後に1時間練習に励んでいる。しかし、高等部のサッカー部が他校にはないため対外試合は限られ、大会の競技種目にも入っていなかった。

そこで、選手に活躍の場を提供しようと、特別支援学校体育連盟が工夫。公開競技に入れ、対戦相手として知的障害の社会人と中学生の混成チームを編成した。約1時間、コート駆け巡ったあぶくま養護は7-1で勝利を飾った。

ハットトリックを成し遂げた1年生の橋本直樹さん(15)は「結果を出して、チームメートに褒められ、自信がついた」と振り返る。1年生の芳賀寿也さん(15)は大会で課題を見つけ、「正確なパスを出すという目標を持って練習するようになった」と自身の変化を語る。教諭らは「目立たなかった生徒が輝いていた」と選手の成長に目を細めた。

今回、公開競技として成功したのを受け、来年の大会では正式種目になる。体育連盟によると、他校からも参加の意向が伝えられているという。坂本文則教諭は「同じ年代が相手だと、負けられないという闘争心が強くなり、練習にも身が入るようになった」と効果を語った。

スポーツ大会の会場には各校生徒や教諭らが多数集まり、声援を送る。県立いわき養護学校(いわき市)のバスケットボールチームを率いて参加した二階堂俊介教諭は「観衆に注目される経験が少ない生徒にとって、やりがいを見いだす場だ」と話す。ただ、教諭や生徒の親、大会関係者からは「もっと多くの競技を」と裾野拡大を求める声も上がっている。

### 育む心と体：特別支援学校とスポーツ / 4 県大会10年目の課題 / 福島

今年の参加者479人 実施競技増やしたい 毎日新聞 2010年12月22日

特別支援学校の生徒が集う毎年恒例の「県特別支援学校スポーツ大会」が始まったのは02年。「練習だけで成果を見せる場がなければやりがいがない」「技術を高める目標がほしい」との声が、教育現場から上がったのがきっかけだった。

特別支援学校体育連盟事務局を務める県立須賀川養護学校（須賀川市）の高屋隆男校長は、「各校長が話し合い、第1回は学校それぞれから少しずつ資金を出して開催にこぎつけた。現場教諭も手弁当で準備した」と振り返る。会場は本宮町（現本宮市）の体育館で約200人が参加。バスケットボールとフライングディスクの2競技のみだったが画期的な出来事だった。

この様子を見た県教育委員会は大会の意義を認め、翌年度から費用や手続きの支援に乗り出した。今年10月の第9回大会では、百メートル走や八百メートル走の陸上、球を転がして目標に近づける障害者スポーツ「ポッチャ」も加えた4競技に発展。参加者は479人に増えた。

出場校には大会前の数カ月間しか練習しない学校もある。体育の授業でやっただけで出場する選手もいる。しかし高屋校長は「それでもいい。障害はさまざま。だから目標に向かう形もさまざま」と語る。

体育連盟は2月、各校が放課後にどんなスポーツに取り組んでいるか調査した。最も普及しているのは7校が挙げたバスケットボールだった。大会競技に入っているうえ、室内で練習できるので教諭の目が届きやすく、指導者も多いためだ。来年の大会で正式競技になる5人制サッカー「フットサル」に出場の意向を示した学校があるので、試合の機会さえあればその競技を始めたいと思う学校や生徒がいるとみられる。

一方、大会競技にはない卓球が2校、パドミントンとソフトボールも1校ずつあった。これらの競技実施など、大会の拡大が今後の課題。調査に当たった県立石川養護学校（石川町）の村上光輝教諭は「大会は生徒がスポーツに取り組むきっかけを生む。練習を通じたさまざまな体験から、生徒が自立への道を歩むことができる」と指摘する。=つづく

スポーツの現状 県特別支援学校体育連盟が2月に行った調査では、特別支援学校のうち分校を除く16校で放課後取り組んでいるのはバスケットボール7校のほか、フライングディスクと陸上競技が各6校、ポッチャ5校と続いた。大会直前など期間限定の活動も含まれる。活動なしは4校あった。また、生徒が学校外で取り組むのはサッカーで26人、バスケットで13人いた。

## 育む心と体：特別支援学校とスポーツ／5止 卒業後のクラブチーム / 福島

心のよりどころに 健常者と一緒に練習も 毎日新聞 2010年12月23日

特別支援学校でせっかくスポーツに親しんだのだから卒業後も楽しめる場所を、とできたのが福島市に拠点を置くバスケットボールチーム「福島クラブ」。01年、同市立福島養護学校の高等部でバスケットを指導していた原美子教諭＝現県立大笹生養護学校（同市）教頭＝が発足させ、監督に就いた。知的障害がある15～36歳の26人が参加。プレーを楽しむ以上に、みんなが集まる大切な場所として、心のよりどころになっている。

月曜日の午後6時から3時間、市立体育館で練習する。怠けないよう「練習の翌日は仕事を休まない」というのが唯一の約束だ。施設利用の手続きや送迎など、クラブ員の家族がサポートしている。

卒業生は、職場で健常者と意思疎通がうまくいかず、疎外感を味わうこともある。原監督は「社会に出ればストレスもたまる。ここは仲間が集まり、リフレッシュする場所」と語る。同じ境遇の家族も悩みを相談し合い、信頼が深まっている。

同じ役割を果たす場所として、郡山市には05年、サッカークラブチーム「SFIDA（スフィーダ）郡山」ができた。スフィーダはイタリア語で勇気の意味。毎週土曜日の午前中、県立あぶくま養護学校（郡山市）で、小学5年生から29歳まで40人が汗を流す。

特別支援学校卒業生が参加するクラブチームは、これらを含めて県内に5チームあり、ボランティアで運営されている。スフィーダの監督は県立須賀川養護学校（須賀川市）の

笹山清美教諭だが、仕事外の活動。手伝うスタッフ約10人は、趣味でサッカーをする人、社会福祉や地域活動に興味がある人と、決してサッカー指導や障害者教育の専門家ではない。

このチームの練習で、巧みなドリブルを見せる少年がいた。鏡石町の小学校6年、黒羽秀(しゅう)さん(12)。障害はなく、健常者の地元クラブに入っているサッカー少年で、練習がない週末はあぶくま養護中等部2年の兄、更(つかさ)さん(13)がいるスフィードに参加している。

笹山監督は「一緒に練習するだけだが、プレーがお手本になり、助けられている。福祉の経験など硬く考えず、誰でも来てもらえたらありがたい」と話す。卒業生が社会に溶け込むためにも、クラブ活動に一般市民が参加し、交流してくれるのを障害者と一緒に待っている。(種市房子が担当しました)

### 洗車店 評判ピカイチ

読売新聞 2010年12月24日

真剣な表情で車を磨くスタッフら(大阪市住吉区の「まちの洗車屋にじ」で)



知的障害者の自立支援施設を運営する社会福祉法人「あさか会」(大阪市住吉区)が洗車施設を併設し、丁寧な仕上げで人気を集めている。施設を利用する男女7人が手作業で車体を磨き上げ、口コミで評判に。開店後5年間で売り上げも年々伸び、これまで平日だけだった営業を土日に広げることも検討、「障害者就労のモデルに」と期待が膨らんでいる。

同会運営の施設「はあとらんど浅香」の敷地内に、乗用車1台分のスペースを「まちの洗車屋にじ」と名付け、開設した。施設職員の野田隆広さん(30)が中心になり、周辺の企業経営者らに協力を呼びかけて運営している。

野田さんは施設の外でも仕事ができるよう厳しく指導。スタッフの障害者らは数十種類の洗剤やワックスを使って体をいっぱいに動かし、ピカピカになるまで車体を磨いている。

開店当初は不安も多かったというが、手を抜かない作業に客の反応も良く、「一番上手な店に出会えた」と言われたこともあるという。

2005年の開店から07年度までは年間売り上げは40万円以下だったが、08年度は160万円、09年度は360万円と徐々に増え、今年度は10月末で既に300万円に達した。スタッフの工賃もアップし、以前携わった園芸や木工作業の約10倍の月2万円を稼ぐ大阪市東住吉区湯里、長岡利和さん(25)は「貯金したり、プロ野球を見に行ったりできるようになった。仕事も頑張ろうと思える」と話す。

店を見学した京都府のビル清掃会社が新たに障害者の採用を決めるなど、理解を深めるきっかけにもなっているといい、野田さんは「障害者だからできない、というイメージを変えていきたい」と力を込める。

午前9時～午後3時半。雨天の場合と土日、祝日休業。問い合わせは090・9867・6989へ。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行